

分教場の跡を訪ねて その(八)

・佐伯市立上堅田小学校

大越分校 大越校舎

高 司 良 恵

(会員・佐伯市宇山区)

(一) 大越分校のあゆみ

◆大越村「袖の木原」に寺子屋が設けられたのは明治の初めであった。当時は村役人を師匠に、読み、書き、算盤を教えたが、子どもの数も多くなり、諸経費も重なり、教場も手ぜまになって、寺子屋運営も大越地区だけでは、手いっぱいになった。

◆村の中心には、「長池尋常小学校」(現上堅田小学校)が設置されていたので、村の関係者の奔走により、分教場設置の準備が進められた。

◆明治三十四年一月 長池尋常小学校大越分教場として発足、管理者は小田部隣、校長正田泉、教員数一名で児童数十名位、年間の経費は約百円で、校舎は部落共有の山林を切つて材料を出し、一教室と事務室付きが建てら

れた。

◆校舎の移転 現在の県道を越えて西側に移築された。

この頃上級生は本校まで、兎道のような今の県道を、遠い子どもは十五トにも及ぶ道のりを、朝は提灯をたよりに日暮れには再び明りを入れて、草鞋わじが掛けで通学していた。

◆明治四十三年 川原木吹原まで道路が開通した頃の分教場は、地区で唯一の文化施設であり、文教の中心でもあった。昼は教鞭をとる教師も、夜は青年達を相手に算盤や書道を教えた。

◆分教場の内容整備 その頃は児童数も十五名前後で、一内至二学級に編成していた。

◆昭和十年 国策による木炭生産の増強と、木材需要の高まりで、他地区よりの移住者が増え、児童数も十五名を越えるようになった。

◆昭和十二年四月一日 鶴岡村と一緒に佐伯町に合併し、上堅田地区から町長として黒木幸太郎が就任、地域振興に大きな力となった。一年から六年までを単級または二つの学級に編成して、授業が行われていたようである。

◆昭和十六年 市制施行後は校舎内部の改造をして二教

室となり、併設されていた教員住宅も改装された。児童数は二十名を越え、教師も一乃至二名が教育にあたりつていた。

◆終戦前 市街地では空襲におびえ、食糧難に加えて児童の奉仕作業等で、教育活動にもぶり勝ちであったが、大越地区は山間地が幸いしてか、比較的落ちついた平和な教育が出来たようである。

◆施設 設備も序々に充実して来たとは云え、「分校」と云う名の下に、他に比べればまだまだ劣っていたようである。それでも学問を志す親や子の熱意は高く、義務教育だけでは満足せず、悪条件にもめげず、それぞれ各種上級学校へと進学する者も多数であった。大越分校を土台にして、地区の教育水準も年々高まって行った。

◆終戦後 児童数も分校の全期間を通じて最高となり、多い時には五十名近くになった。

◆昭和二十七年八月 老朽化した校舎を廃し、現在地(現グリーンピア)に山を削って平地を作り、川に架橋して二教室、事務室、簡易水道を完備した。この校舎は建面積約二百平方メートル、運動場約二千平方メートルもあり、分校としては他に誇り得る立派なものであった。地区では、運動

場の囲りに五十本を越す桜の苗木を植え、桜の名所となる基も作った。また、旧校舎の一部は教員住宅として残された。児童数十五名前後、教師一・二名では、その管理も大変なため、四季を通じての草刈り作業や大掃除、施設補修の奉仕作業など、愛校心豊かな親達は子どものため、分校を大切に守り通して来た。

◆昭和三十年頃 都会に移住する人も増え始め、地区の人口も減少の一途をたどるようになり、児童数も二十名を下回る年が続くようになった。この様に分校も少しづつ淋しさを増していった。しかし、地区の人々の愛校心は強く、材木を出し合い、労力奉仕をしては、ブランコや低鉄棒の作り替え、山の珍しい木を掘り起こしては学校に持ち寄り、環境整備に力を入れた。本校や教育委員会との指導交流も、活発に行われるようになった。「学校図書館法」によって図書の実と情操教育に音楽教育が取り上げられ、少人数ながらも合唱や合奏による、子ども達の歌声が聞かれるようになった。また、テープレコーダーや幻灯機などの視聴覚教具や、シートほかの運動器具・遊具類も整備され、学校としての姿も整えられていった。

◆昭和三十九年 一年から四年を一学級にした単式授業を解消するため、県の特別措置で教師の定員も二名となった。東京オリンピックを記念した花壇や、理科の観察池も作られた。

◆昭和四十年 大分国体を記念して、国旗掲揚台が十五名の児童と、二名の教師並びに父兄の協力により手作りされ、分校にも日の丸の旗がはためき、五月ともなれば手製の鯉のぼりが大空を泳いだ。また、粉乳によるミルク給食も、教師の手を煩わしたが開始された。佐伯からパンやビスケットを購入して、おやつとして与えた。

◆昭和四十一年 地区民の拠出金により、三百名も離れた地点にアンテナを立て、テレビによる学習にも一歩踏み出した。また、学校環境作りに藤棚も作られた。

◆昭和四十三年 老朽化した机や腰掛けが、地区民の拠出金によりスチール製に取り替えられた。教材費や市の予算も独立校並みに計上され、教授用具の整備も急テンポで進められた。「この山の中にこの様な分校が」と、児童の姿やその環境に目を見張るようになった。

◆昭和四十三年 市教委の配慮により「理振法」の適用を初めて受け、理科実験のため本校へ器具を借り受けに

行く手間も省けた。この年父兄の奉仕により、コンクリートブロック製の校門も出来、NHK「二豊路の春」に紹介された。

◆昭和四十四年 教材費によってピアノが購入され、音楽教育にも一段と精彩が増した。

◆昭和四十五年 「大分県長期総合教育計画」の中に、廃止予定校として当分校も組上りのほった。児童数十名、これから先年々減少の一途をたどるしかない児童数に、心配の声も出て来た。過疎化の波にもまれる当地区も、人が寄れば分校の話が出た。廃校による文教のシンボルを失い、より一層過疎化が進めば、本校までの通学不便……と賛否両論の意見が交わされた。

◆昭和四十六年頃 児童数の減少を喰い止めるすべもなく、教育委員会からの呼びかけもあつて、再三の話し合により遂に分校の存続を諦め、上堅田小学校への吸収統合に同意した。

ここに大越分校は昭和四十六年度末を以って廃校、上堅田小学校へ吸収統合され、四十七年度は同校大越校舎として一年を過し、四十八年度より全児童は、上堅田小学校へ通学することとなった。

この間にも学校の整備はたゆむことなく進められ、学校前の橋もコンクリート橋に掛け替えられた。昭和四十七年九名の児童は二人の先生と共に、二度と巡って来ないであろう、それぞれの学年を力いっぱい学習し続け、廃校の淋しさなどの子の顔にも伺うすべもなかった。乏しい資料と古老の話をつよりに、分校の歴史をふり返って見ると、寺子屋の初めから一世紀近く、分校としては七十三年の長い歴史であった。

住居を移して九年間、大越分校に廃校まで勤められた、松井正明・カネ子先生御夫妻のお宅にお伺いして、貴重な資料と当時のお話を聞く機会に恵まれた。先生御夫妻とは初対面ではあったが、柔和なお人柄に、すっかり魅了され、時のたつもの忘れてユニークな分校経営を始め、分校ならではの裏表や、エピソードに話はずんだ。

話を聞きながら大越分校は、①長い歴史のある分校②地域の人達の分校を守る結束力 ③行政機関に対しての高い関心度等が強かったことを知った。

御夫妻は、家族同伴で大越に引越され、昼は教壇に立ち帰れば父母として、地域に溶け込んだ九年間の分校教育は、楽しくもあり充実した日々であったと当時を懐か

しんでおられた。

鹿肉、猪肉、椎茸、鮎、野菜、木炭、薪…と自然の産物に恵まれることもできた。

時折り庭に目を向けると、器用な先生手作りの広い庭には、大越の一木一草が大きく根付き、赤い実を結んでいた。水を張った池の石は、すべて大越川のものだと感慨深げに話して下さった。

(二) 大越分校の子ども達の姿

本校で行われる運動会では、少人数でありながらも地区別リレーで優勝、マラソン大会には上位で入賞し、佐伯市小学校陸上記録会では、四年女子百メートル競争で一位優勝の栄冠は、この小さな分校から生まれた。図画・作文募集コンクールにも応募し、入選する子も出てきた。

NHKの取材には、ものおじせずカメラの前に立てる子どもに成長していた。

七十三年の長い分校の歴史にピリオドはうたれたが、分校の灯はいつまでも消えることなく、大越の人達の心の中に生きづいて、語り継がれていくことと思う。

歴代分校に務められた先生方、九年間の長きにわたり

分校を支えて無事廃校式をすませ、本校にバトンタッチされた松井先生御夫婦に敬意を表し、惜しみない拍手を贈ります。

平成九年度 大越地区の子ども

・上堅田小学校へ三年男子一人（タクシーで送迎）

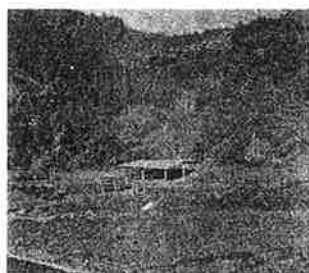
・南中学校へ三年女子一名（自転車通学）

・大越地区 世帯数二十八世帯

男子三十八人 女子三十二人 計六十人

【追記】

本校までの通学について道路整備・タクシーによる児童送迎・分校前の橋のかけ替え等（現グリーンピア入口の橋）行政側との交渉に松井先生の日夜を徹しての御努力と、御熱意はすべて実現し、大越分校七十三年の歴史に大きな花を添えることができました。



寺子屋跡地 今は牛舎がある



在りし日の校舎



大越分校の歴代管理者・歴代校長

歴 代 管 理 者	歴代校長（上堅田小学校校長兼任）
小田部 麟 明治 23年	疋 田 泉 明治 35年
黒 木 幸太郎 37年	内 田 貫 道 36年
脇 田 弥太郎 44年	疋 田 泉 37年
川 原 泰 蔵 大正 8年	坂 本 喜久太 42年
岩 田 秀太郎 11年	杉 原 大正 2年
池 田 長 作 昭和 8年	高 司 正 直 4年
武 石 民五郎 9年	坂 本 喜久太 6年
黒 木 幸太郎 13年	小 野 春 雄 15年
高 司 正 直 14年	今 山 力 吉 昭和 2年
合 田 兼 安 16年	染 矢 覚治郎 6年
阿 南 卓 17年	滝 川 再 郎 12年
安 藤 正 人 21年	小 野 武 雄 16年
矢 野 龍 雄 22年	森 脇 清 21年
出 納 菊二郎 30年	柴 田 寿 雄 24年
池 田 利 明 42年	古 城 智 28年
	広 瀬 豊 城 31年
	居 本 武 34年
	塩 月 靖 邦 40年
	増 村 秀 巳 42年
	三重野 政 男 44年
	神 田 到 45年
	高 畠 新五郎 46年

〔三〕「おわかれ文集より」

昭和48年3月

先生長い間お世話になりました。分校で勉強した四年間、その間楽しいこと、悲しいこと、苦しいことなどがたくさんありました。

そんなことを経験した分校も最後の時が来てしまいました。ほくはこの分校に感謝をしたい。この分校があったからこそまで成長できたんだ。この分校があつたからみんなで楽しくできたんだ。先生たちの苦勞がよくわかります。先生長生きをしてがんばってください。分校とほくのこととも忘れないでください。又いつか会える日を楽しみにしています。

三月二十八日

日 男

先生へ



おわかれ文集の表紙より

〔四〕大越谷に行く

松井先生のお話を聞き、また、何度か大越に出向いたことを思い出し、小春の日ざしを浴びながら、自転車十五^キの道のりに挑戦した。

総合運動公園から上城に出て、県道六〇三号を岸河内から大越川に沿って走る。水涸^かれた川原には葦の末枯れが、まぶしく続いている。

岸河内の家並みを過ぎて少し行くと、右手の道上に「三界万靈至聖等」耳塚等がある。貞亨五年（一六八八）七月十五日、大庄屋芦刈清兵衛により建立、天正十四年（一五八六）十一月、島津の大軍が攻め寄せた時、佐伯梅牟礼城主佐伯惟定は、これを堅田谷に迎撃大敗せしめ、戦後の論功行賞に首実検が行われたが、余りにも多数の死者だったので屍から耳をそぎとって耳実検に供したあと、これを埋めた塚である。なんとも痛々しい出来事である。

合掌

その辺りから道はだんだん登りになる。自転車からおりては押しながら行く。杉木立・茶畑・椎茸と手入れが行き届いている。大越川も上流に入れば谷川の水音、川のせせらぎが聞こえてくる。

・裸木の枝はずませて小鳥去る

良 惠

やがて千人塚の標柱のある所に着く。下堅田小学校勤務の頃は、西野を通って千人塚川原に遠足に行った思い出がある。その時に見た五輪塔が今も印象に残っている。千人塚とよばれている敵味方の供養塔は、越のほとりに文政五年正月、堅田村の大庄屋吉刈八郎兵衛によって建てられ、「日輪当午塔」と名づけられて佐藤掬水が、古戦場を弔う流麗な文章で書きしるしている。この天正十四年から数えると四百年餘の歳月が流れている。

：「兵どもが夢のあと」を、回想に耽りながら再び自転車に乗る。

道中もさらに狭くなり、目前に山が迫ってくる。まだかまだかと思いつつ、右に山、左に谷を見ながら進む。

やっと下大越に着いた。山裾にひっそりと人影もなく、過疎という実感がする。ここを通り過ぎてしばらく行くと、神社があった。社殿は建て替えられていたが、境内の大銀杏は長い歴史を物語っていた。そのすぐ傍に山の神、鳥居の脇に水の神を祀る祠があった。石を積み重ねた棚田は、ひつじだ 稽田になって薄緑色の田んぼが、冬日に映え

て、とても美しかった。

やっと分校の入り口まで来た。二・三軒あった家は廃屋になっていた。分校に渡る橋はとも立派になっていた。土橋・丸木橋・沈み橋・木橋・鉄筋と橋にも時代の波があった。

桜並木の坂道を登って分校跡に着いたが、そこには市民のための憩の施設、グリーンピアと呼ばれる近代的な建物があり、その名も緑風荘と名付けられ、入り口には平成二年七月麗日完成という碑が建てられていた。

どこかに分校の名残りはないかと探してみた。裏手にまわって見つけたものは、すっかり錆びついた遊具のジャングルジムだった。私は近寄ってゆすってみた。まだまだ丈夫である。足をかけ登ってみた。分校の子どもの声は垣間きこえてくる思いがした。その外のは見



正門まで続く桜並木の坂（昭和27年植樹）

つけることが出来なかった。

周辺に植えられた桜を始め、諸木が繁りなにかしら淋しさが感じられた。全盛期には五十人を越していた子ども達、今はたったひとり、こんな時代を誰が予想したであらうか。

・閉ざされし分校抱き山眠る

良恵

来る時は、人ひとり、車一台にも出会わなかった道は帰途についた。息いっぱいに自転車を漕いだ坂道も帰りは軽くすいすいと岸河内に着いた。

分校は四年生までで、五・六年生は本校に自転車を通



分校時代の正門（昭和43年）

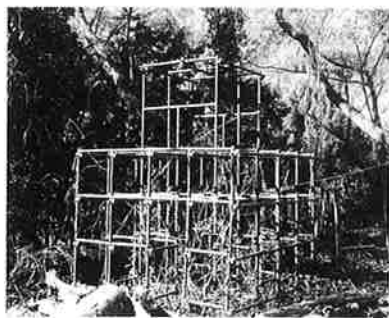


現在の正門（平成9年）

学した。

私自身今日一日の体験で、あらためてひるまない強さをもった分校の子ども達に、言葉では尽くせない逞しさを感じた。

（平成九年十二月十五日）



たったひとつ残されていた
ジャングルジム

◆松井正明先生・カネ子先生御夫妻（市内百谷区在住）

より資料提供とお話を聞く

◆佐伯市史

◆岸河内の碑文

◆上堅田小学校 南中学校 上堅田公民館